法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-11

独歩文学の基盤 ： その文学観について

鈴木，仙蔵

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
26
(終了ページ / End Page)
34
(発行年 / Year)
1959-11-16
(URL)
https://doi.org/10.15002/00018988

独歩文学の基盤

――その文学観について――

鈴木仙蔵

1

国木田独歩が茅ガ崎の南湖院で死去したのは明治四十一年六月二十三日であった。雑誌「新声」および「新潮」は七月号を追悼号として編集発行し、雑誌「趣味」は八月号を拡大号とし、「文豪国木田独歩」と表紙中央に印刷した追悼号を発行している。

「独歩集」（**明38・7月**）の巻頭に「予の作物と人気」の序をのせて、読書界に迎えられぬ不満をのべ、「只だ僅に文壇の片隅に籍を加へ居るが如き観あり、これ甚だ面白からぬ事と謂ふべし。」と文壇の傍流にある不遇を嘆いた独歩が、「独歩集」出版後のわずか三年間に、それこそ、「満都の人気を一身にあつめ」（**同序**）るように惜しまれて死んだわけである。(1)

「不断の精進と、情熱と、洞察の力とを有し、意味多き生涯を送りたる人々の外に、天才なるものが有るとも思はれない。斯の意味で、私は北村透谷、長谷川二葉亭、国木田独歩の三氏を敬重する。」（**「成功」明44・8月号**）

島崎藤村は「『明治文壇天才観』への回答」という文で明治文壇において、「意味多き生涯を送りたる人々」の一人として独歩を「敬重」すると述べているが、また「早稲田文学」記者との談話、「古きを温ぬる心」（**早稲田文学明44・9月号**）においても、記者に次のように問うている。

「あなた方の仲間では、近く死んだ人、例へば二葉亭とか独歩とか言う文壇の先輩の遺した事業を引受ようとする人はありませんか。」と、記者が「事業を引受ける」ということを作品の再刊という意味にとって問い返えすと、藤村は、

「いや、精神的の事業です。あの人達の生涯やあの人達が開拓しかけた文学をです。」

と答えている。

この談話で藤村が言う、「精神的の事業」とか、「開拓しかけた文学」といったものは、前に藤村が「敬重する」といった透谷や二葉亭・独歩の文学の何を指すものなのか、ここでは、前にもふれた「独歩集」の序文において、独歩が作家としての不遇を嘆じながらも、自分の作品に対して「矢張り今日までの流儀にて根気よく作る中には、人気を得ることもあるべく、満都の人気を一身にあつめ得

る時もあるべし、ただ詩人の本分としては人気に頓着する能はず、此の一小冊を世に出すも我本分を尽さんと欲するのみなり。」と自信を持って宣言した「詩人の本分」とか「我本分」といった、独歩の作家精神とは、どのようなかかわりがあるのか、独歩の文学の基盤をなしている文学に対する独歩の信念を彼の思想と作品の発展の過程において考えてみることにする。

2

独歩が作品「竹の木戸」（**中央公論**）「二老人」（**文章世界**）をもって作家活動に終止符をうたれた時、初期の「忘れえぬ人々」などに現われていた独歩の『我』が、晩年の「竹の木戸」あたりから一転化一進境の見られることを指摘したのは徳富芦花であった。「暴風」などに見られるように、これからじっくり文学活動にうちこめそうな気配のうかがえた時には、独歩はすでに病にたおれ、「まだする仕事は残って居る」（**病　雑話**）と健康の恢復を望みながら、「暴風」や「**渚**」を未完のまま、三十八歳の生涯を終えたのである。

独歩が実際に作家生活をした時期の短かかったことや、新聞とか雑誌の事業にたずさわっていたので、普通にいわれている作家という常識の範囲からはみ出している作家であったことは、中島健蔵が「国木田独歩論」(2)でいわれているが、独歩の作品に感じられる「しろうとくささ」が独歩の文学の魅力ともなっていること、独歩の作品が現代においても読まれる理由が、中島氏の言う如く、そのような独歩の文学のもつ、同時代の他の作家に見られぬ異質的な面から考えられることであろう。つまり独歩は、「芸術のための芸術」といった職業意識と文学活動において、終生持つことが出来ない作家であったことである。

明治の新時代を自己の成長の過程とともに体験してきた独歩は、市民社会の担当者として主導的地位にあるべき自己をつねに意識していたと思われる。(3) 後年彼がいかに養父専八に感謝していたか、その理由が独歩の出生の秘密に起因していることは戦後、前田重の考証(4)によって一層明確にされたのであるが、「馬上の友」における糸井専造のような時流に逆う父でも、「非凡なる凡人」における桂正作の父のように、武士の「殖産」による失敗者でもない、当時としては順調な家庭生活を「泣き笑ひ」に見られる少年のように父母の慈愛のもとで成長した独歩の少年時代は、父の転勤による家族の転地ということはあったが、幸福な時代であったと思われる。(5) しかし独歩の少年時代がいかに幸福であったとしても、独歩が生涯どんなに親しい友にも養父との関係を告げなかったという事情は、どれほど独歩を内攻的思索型の青年にしたかということも容易にうなずけることである。養子制度について論じた独歩の初期の文章「養子」（**家庭雑誌、明26・4**）において最も排斥したものは家名相続という封建遺制による人間性の抑圧であったことや、封建的な人間関係による家庭悲劇を痛烈に批判する独歩は、「余が友の愛らしき妄想」（**家庭雑誌、明28・4**）に見られるように、友人が小市民的な理想的家庭生活を夢みて将来を語るという形で、夫婦を中心にした近代的人間関係を家族の基礎にすえて、生活を考えているが、そこにも独歩の思想が屈折したかたちで投影されているわけである。

幼い時から弟収二を愛したという独歩には功利的な打算を離れてではあったが、早くから家を弟に譲ろうという考えがあったことは

独歩が家庭において、早くから、いわゆる「余計者」として自己を意識していたことが認められるわけである。そこに独歩の「自由」とか「独立」の意識が、彼の成長にともなって益々強いものとなる原因もあったし、独歩の異様なまでな「個」の探求もあったわけである。

明治二十二年帝国憲法の制定された年は、有産者階級の利益を擁護する藩閥政府が日本の政治を絶対君主・帝国主義へと進む基礎をかためた時であり、民権の拡張確立を主張する民権論者の従来の主張からは遠く隔ったものであった時代において、政治に関心をもつ青年にとって、日本の将来と自己の純心な政治への情熱とは、そのまま自己の将来へとつながる問題としてとらえられ。政治への意欲のあふれた時代であった。

「野望論」（**女学雑誌、明22・11**）において「今日の日本元より維新時代の日本にあらず」・「とにも角にも一転化を経ざるを得ざる運命の日本なり」と藩閥政府に対する反抗的姿勢をとりながら己自身の為に働く利己的野望でなく、「正義・公明、厳粛、壮大」の「正々堂々の光明界を開く」「正人、義士」として青年は現われることの必要を独歩は論じているが、封建的な家族制度の矛盾を強く意識する独歩が、その改正を近代的個人生活の確立へと発展させ、政治的に解決しようと考えていたのである。

柳田泉によって独歩の処女発表かと見られている「群書ニ渉レ」（**青年思海、明21・3・15**）が、氏の言われる如く、独歩の初期の文章であるとすれば、独歩は「吾等が仲間入セントテ苦心スル、政治世界ノ好時節ハ未来ニアルモ、兄弟ガ実力ヲ養成ス可キ好時節ハ電光石火ト去リ行クヲ記憶セヨ」と言い「泰西諸文明国ト背ヲ比べ」るために群書を渉漁して「奮進勉励」し、「家制ヲ改正シ、国政ヲ改良シ、農業商工業」を盛にすることを自己の任務と考えていたことは明白であるが、上京後法律や政治を学んだ独歩が政治的事業欲に燃えていたことは「野心論」の口吻を通してもうかがえるわけである。

独歩が政界への進出を夢みて「自由新聞」記者の生活に入ったことについてはすでに多くの人々によって論及されているが、「欺かざるの記」に見られる「吾は断じて予言者たる文章の士、大革新、大実行者たる政治家たるの希望を以て進む可きなり。」（**明26・2・19**）という独歩の「宇宙的理想的」事業とは、政治家としての革新事業であったが、ここには「民友記者徳富猪一郎氏」（**青年文学明15・11**）において独歩が、平民主義の主唱者徳富蘇峰を評して、「民友記者は精神的革新の伝道者、平民主義の主唱者也、然れども未だ容易に予言者、説教者、教師也とは許す能はず」として、蘇峰には、ミルトン・ワシントン・ユーゴーに見られた「基督教的道念の活火」に欠けていること、つまり、「満腔の至誠を以て『平民の友』たりしや。是等英傑を生みたる者、生まれたる是等の英傑に由りて発揮せられたる者、即ち欧州文明の根底に鬱勃せる活火を以て活動せよと、蘇峰の評論活動に「基督教的道念の活火」を望み、「土を発て根本を教へ、百花根源の大心を予言」せよと批判しているが、独歩が素材に政治的事業欲で将来の革新家を夢みた維新の志士型の青年から、植村正久の洗礼を受けたり、キリスト教や、自由民権論など泰西文明によって精神的に開眼して、自由社に入る決意をしたこの時期までには、独歩の思想において革新思想の内容に深まりのあったことが知れるのである。

だから独歩が「自由党の天職は吾が国政の大革新に在り、自由党

の精神は自由平等に在り。」（**明26・2・3**）「丈夫腕を振ふに足るの事業」（**同**）と政界に進む決意をし、入社を決意した二月十四日を、独歩は「吾が此の天地の間に来りたる誕生日と共に記憶し置く可きの日なり」（**明26・2・16**）と重大な人生の転期と考えたこともうなずけることである。

独歩が政界進出にあたって、「宇宙的理想的」の革新事業を決意したことは、前述の如く、民友社流の平民主義やキリスト教の平等思想の感化によって、先覚者的革新の精神に燃えていたからであるが、「二十三階堂主人に与ふ」（**青年文学、明26・1**）において見られる文明社会と貧との関係についての独歩の考えは、「老牧者、一村女も幾多のハムレット、幾多のマクベスよりも大なり。」（「**田舎文学とは何ぞ**」**青年文学、明25・11**）という「人間は大なり」との個の自覚に立って、貧乏を社会悪と見るよう、「冷淡、偏頗なる社会の注意をして少しく暗惨の方面に向け」ることの意義を「平民文学」のために希望しているのであるが、「個人を見ることはあらゆる歴史を見ることなり」（**明26・12**）という独歩に一貫した、「個」の自覚は、たとえ、「宇宙的理想的」という革新の事業が空想的なものであったとしても、この時期には、すでに社会主義的な面にも弱いものであったがふれていたことは注目されることである。(6)

独歩は政界進出について自己の立身出世欲や功名欲を深く反省して、革新的理想に燃えて入社を決意したのであるが、自由新聞記者の一ヵ月の生活は、このような独歩の理想を「破滅し去る」「社会生活の魔力」がひそんでいることに気付かせ、自己の理の真正を深く信じる独歩の我慢できぬ生活となった。

「事は志と差ひ、志は俗情のために汚がれ、日々之れ送る虚想の夢」（**明26・3・15**）「政界の奔走は吾の好む所に非ず、人生の説明、人間の批評、宇宙の考察は吾望む可きなり」（**明26・3・16**）と、「権勢を愛し、虚栄を願ふ」政界狂奔の自己の功名欲に深く反省を加え、「愛と誠と労働の真理を吾が能くするだけ世に教ゆるを得ば吾が望み足れり。」（**明26・3・21**）と政治による理想の実現を断念して、「断然文学を以て世に立たんことを決心せり。」（**同前**）と「人生の説明、人間の批評、宇宙の考察」といった「人間の教師」としての文学の面からの革新を真剣に考える地点へと後退したのである。

自由社入社に始まる独歩の日記「欺かざるの記」は、このような先覚者としての自己の使命を確信する青年が政治からの逃避としてしか「自由」や「理想」の生かしようのなかった時代を、誠実に自己の人生を生きようとした青年の一つの典型を示す記録と見ることができる。(7)

自由社退社後の独歩は自己の「天職」をいずれに定めるべきかという問題を幾度となく思い迷い、佐伯の生活においても、日清戦争の従軍後においても解決されず、「実際の政治界に従横奔走して今日の吾が国を政治面よりと救ふ可きか。」「断然、伝導師たる可きか。」（**明28・5・22**）とますます判断に苦しむ。独歩は、自己の内面に沈潜して、自己を「小宇宙」と感じ、神を求めて、自己の存在を「無窮の天地に介立する一個の生霊」と意識する。「われは自由の霊なり。故に詩人たるべし。」（**同前**）と独歩は自己の存在を純粋な姿で探究しようとして、「自由」や「独立」の観念を一層唯心論的に深めて行くが、ここではすでに政治面からの革新には離れた立場

に立つ独歩が精神面での思索に深まりをましたことになる。

政治家、伝導師、詩人、一農夫のいずれを選ぶとしても、独歩の生き方には神の与えた「天職」を離れては考えられないとする独歩が、北海道移住を真剣に計画したのは、このような「吾」の存在を純粋な姿で生かし得る処は、そのような現実社会から隔絶された原始、素朴な自然にしか求められないからであったし、社会的な名利を離れて、独立自由の生活を一農夫として淳朴な山林の中に送り、そこに信仰に生きる純粋な自己の姿を求めたからであった。

「『佐伯に於ける一年の生活』に就て熱血をそむる程に著作せんと欲す。此著作を以て吾旧生活を閉ぢ、直ちに北海道風雪のうちに投ぜんことを期す。」(明28・7・20)

「昨日より『死』を作りはじめて己に四十余枚を書きぬ。『欺かざるの記』を成就する前に此著を了らんと欲す。」(明28・7・25)

友人の宮崎湖処子にすすめられて、佐伯の生活を著作にまとめようとした独歩は、佐伯における自然の中で探求した美や自由や人情の無窮を信じ、それを求めた当時の真摯な生活を北海道の開拓生活にも空想して継続しようとしていたから、北海道移住を以て旧生活を閉じ、「欺かざるの記」の完成としようとしていたわけである。「独歩吟」の中の「沖の小島」などにおいて、「人がすむなら恋がある」と汚れない人生に楽しく恋を確信できたように、佐々城信子との恋愛を移住後の新生活に発展させて浪漫的な信仰生活に独歩の空想は情熱をそそいでいたわけである。

しかし、独歩のこのような夢も信子との結婚を急ぐ事情が生じ破綻した。独歩は信子と結婚するために「人生は戦争なり」(明28・10・28)「最後まで戦へ、根気の続く限り戦へ。」(明28・10・3)と社会的ないかなる拘束もはねのけて恋愛を貫いて信子と結婚したが、この新家庭の浪慢的な夢も信子の失踪によって破れ。その苦悶を独歩は自己のアメリカ行によって一変させようと計画して、明治二十九年五月に日記の筆を一度措いたのである。が、その後百日ばかりして、再び「欺かざるの記」は書きつがれている。

「欺かざるの記」はなぜ再び書き続けられたのか、日記は、政治にいだいた理想に破れ、家庭生活の純潔な夢にも破れた青年が最後に自己の信ずる人生を文学への道にと踏み出したことを示している。信子失踪後の失意と苦悩は独歩に、「無限無窮の天地を獄舎の如く感ぜしむる」(明29・5・4)とまで悲嘆させたが、信子との恋愛において「人生は戦争なり」と自己の真正な望みを貫くためには戦うこと以外にないことを知った独歩は、信子の失踪による失意と苦悩とにも「格闘」することで克服する以外になく、「人生の戦い」をこれまで幾度も繰返し迷った、文学への道に進めることでのりこえる決意をしたからであった。「欺かざるの記」が再び書きつがれたのも、独歩は、再び「わが願とは夢より醒めんことなり。」(明29・8・17)という自覚と、文筆に従事しようという自己の「天職」を再確認できたからであった。

「断乎文学界に突入せんと欲す。われは宗教の人たらんと欲し、文学の人たらんと欲するが如きことをせず、ただ此の夢よりのがれ出でて、天光に浴せんことを希ふのみ。」・「詩人となりてわれは飢えん。」(明29・8・26)という作家への道を決意したからであった。

「林中にて黙想し、回顧し、睇視し、府仰せり。『武蔵野』の想益々成る。

われは神の詩人たるべし。」

「われは益々神の確信を求めん。益々不思議を見んことを力めん。われは牧師にあらず、されどわれは神を知らんとねがふの人なり。

牧師的詩人、これ余の満足する所なり。」

「美なる天地よ、深き御心よ。不思議の人生、幽玄の人情よ。われは此の中に驚異嘆美して生活せんのみ。

嗚呼人生これ遂に如何。

林よ、森よ、大空よ。答へよ、答へよ。」（**明29・10・26**）

と、天地、自然の中に、「神の詩人」・「牧師的詩人」として人生の不思議に驚異嘆美して生活しようとする。

「独歩吟」の中の「人のすみか」において「浮世」からの脱出はできても。自己を人間として存在させている「天地」から逃れ出ることはできぬのだと、人生の失望や、苦悩・自殺・狂死にまで人間をつきつめる苦悶の現世を浮世として獄舎と感じる独歩が、このような天地間に「神」を求める詩人として「人生の不思議を痛感」したいと願うのである。

「山林に自由存す」（**独歩吟**）と歌った独歩は、小品「星」（**国民之友、明29・12**）において、「自由の血は恋、恋の翼は自由なれば、われ其一を欠く事を願はず」と詩人に答えさせているが、そこにはワーズワーズ的自然観による「山林の子」としての「自由」と。前述の如く独歩が青年期において政治にいだいた「自由」革新の理想の情熱を詩人の浪漫的願望にたくして語られているのであるが、この時代の現実にも、独歩自身にも、このような浪漫的な基盤はすでに崩れ去っていたので、天外に聳える高山の雪に「地上にて望むも甲斐なき自由にあこがれ」涙する詩人として描く以外になかったわけであったし[8]、佐伯の生活において自然の中に人世の不思議と人情の悲調を痛感して、自我の存在を確認し、人間の歴史を死の事実と対決して「人生如何に生くべきか」と迫った独歩は、北海道の原始林の中で、赤裸々な「自我」と天地生存の宗教的信仰観との対決を求めたりした自己のこれまでの生涯を「吾は遂に失敗者なるか。失敗者にても可なり。」（**明29・9・7**）という悲痛な自覚の上に立ちながらも、なおも、「人生の意義」を追求しようとしたところに独歩の文学は発するわけである。

3

独歩は処女作「源叔父」（**明30・8**）より、晩年の「竹の木戸」・「二老人」（**明41・1**）までの作家活動において、すでにふれた如く、創作活動ばかりでなく、報知新聞の記者とか民声新報の編集や、近事画報の編集および独歩社の経営など実際事業面の活動もあり、作品の形式も多岐にわたっているので一概に論じることはできないが、北海風雪の地に一農夫となって、新しい人生を開拓しようと移住を計画したときにも友人の死について「死」の著作を進めたように、独歩の思想の根底には、「死」の事実を痛感し、人生の不思議を「死」によって直視しようという願いがあったわけだから、独歩の作品において、人生の事実として「死」がどのようにとりあげられているか二・三の点について考えてみたい。

独歩の初期の作品においては「源叔父」や「死」（**国民之友、明31・6**）に見られるように、人世の不思議や人情の悲調を翁の死とか乞食紀州の行為によって描いたり、友人の死に驚愕しても、「人は容易に『死』其者を直視することが出来ない。」というように、

自己の主張をそのまま述べる手段として死を作品にとり入れているが、「郊外」（**太陽、明33・10**）・「置土産」（**太陽、明33・12**）・「酒中日記」（**文芸界、明35・11**）などの中期の作品になると、自己の生活体験や家計窮迫の現実を反映して、作品の上にも死を生活苦や社会的関連においてとらえるようになっている。「郊外」は小市民の生活に親愛感をよせながら、月に三人も同じ踏切りで鉄道自殺がある踏切りの八百屋などを作品に登場させて、自殺の原因は、「懐が寒くなると血が皆な頭へ上って、それで気が狂ふんだらうよ」と判断させたり、鉄道自殺をも八百屋の商売道具とする親父の考えの中に、「引越して何処へ行くんだィ。」と八百屋をやめれば、彼自身踏切自殺でもする以外に生活のたたない現実にふれているわけである。「置土産」においても主人公の油の小売をする吉次が、「同じ油を売るならば資本を下して一構の店を出し」たいという望みも、それを達成するためには「一稼大きく儲ける」方法としては、愛人にもそれと知らせず、「運悪く流弾に中るか病気にでもなるならば帰らぬ旅」へと、櫛をそっと置土産として軍夫にでもなって、出稼ぎに出る以外に生きる道のない独身者の戦地での病死をとりあげている。

晩年の作品「窮死」（**文芸倶楽部、明40・6**）「竹の木戸」に至って、独歩は自身の経営する独歩社の破産や独歩の病因ともなった多忙な社務や日露戦争後の国民生活全般の窮迫をも反映して、作品の上では、「窮死」に見られるように「如何にもかうにも忍耐きれなくなって」死んで行く人間として主人公をとらえている。独歩は実際に轢死者を見て、その自殺者の気持を思って涙を流しながら書いたと言うが、このような作者の同情が、「二十三階堂主人に与ふ」で独歩が「嗚呼『貧』の一字、此の一字、意呼深く且つ長し、人間生れて地に墜つ、何の為す所もなく、何の期する所もなく、終生堂々、只々貧と戦ひて其の五十年の生命を行る、（**中略**）此の大不公平なる社会が、年々歳々、時々刻々、生み出す悲劇果して幾何？」・「貧は滑稽に非ず、貧は冷笑に非ず」と早くから熱っぽく主張して来た人生問題を、社会問題にも連がる視点に文学作品としての円熟味をも次第に加えながら、一歩踏み出すことによって、人世の真実にふれた作品ともなっている。

「習慣の昏睡より人心を醒起し、吾人を囲む此の世界の驚く可く愛す可きを知らしむるこそ『詩』の目的なれ。更に一歩を進めて言へば人をして自らを此の驚く可き世界の中に見出さしめ、神の真理の中に人生の意義を発明せしむるこそ吾が詩人としての目的なれ。」（**明26・10・13**）と独歩は「詩」および「詩人」を規定したが、独歩はこのような文学観を基礎にして、「経歴以外の事を誰か書き得ん。現ならざりし事を誰か夢み得ん。」（**明30・4・23**）と自己の文学を現実より出発させる現実主義の創作態度をおし進めることによって、「大胆に此天地に立て、見る処、感ずる処、知る処を公言し発表し」て、「暗黒なる時間の大海を突進しつつ行く人類の急先鋒」（**文学者―余の天職**）として自己を自覚し、「如何なる場処、如何なる時にも不思議なる事実を直視」（**天地の大事実**）して、「筆にて真理と美妙と人情とを語る」人生の意義の探求者をもって、独歩は終生自己の天職としたわけであった。

4

日本の近代文学は自然主義において、近代文学としての骨格をそ

なえたといわれているが、独歩の作品が生前それほど評判にならず、文壇に自然派の作品が登場し、自然主義文学の盛んになった死後にかえって人気を得たということも、これまで見て来たような独歩文学の基盤となっている「人生問題」を終生追求したという点に関係する。

正宗白鳥は独歩の作品について、独歩の死の一年前に「今だって充分認められていない」（**独歩論「趣味」明40・4**）といっている。

それは、独歩の作品には戯作風の所が微塵もなく、徳川文学の色も帯びていない点が他の作家とは全く異っているので、独歩の作品を初めて読んだ「女難」（**文芸界、明36・12**）などは「あまり感服しなかった」というのである。そして、「世間で評判もないし書き方が硯友社風でなくて、無骨で簡潔なので、それを味ふ能力が僕になかったのです。」と正直な感想を述べているが、この白鳥の感想が、当時の硯友社風の艶麗な文学に慣れていた一般読者の声を代弁していると思われる。

「独歩集が出てすらあまり喝采されなかったのに、『運命』が出版されてから急に持上げられたのは、『運命』の出る前に、島崎藤村氏が読売新聞記者の名家訪門録に於て同氏の作を称賛されたのが大なる原因ではなからうかと思ひます。」（**前掲文**）と今まで一部の人にのみ認められていた独歩の作品が急に認められた理由に藤村の称賛をあげているが、白鳥でさえも独歩の「女難」などを「肉のない骸骨」のような文学と感じた時代から、「独歩集」を読んで「それを一貫した思想が非常に面白く思はれました。著者が人生に対して骨髄まで染み込んで感んじてゐる感想が、ありありと現はれてゐる。」（**前掲文**）と感服するまでには、「破戒」（**明39・3**）出版後の人気作家藤村が独歩の作品を推したというだけでなく、自然主義文学の価値がようやく理解されて来たという当時の文壇の空気が見られると思う。

島崎藤村も、この論の初にふれた「緑陰雑話」において、

「我国の文壇の作物が浅いと云ふのも畢竟智――と云っても単に理屈ではなくて、深く人生を知ると云ふ様な方面が浅いからではありますまいか。だんだん進んで来るに従って其作物も人生に相触れたものとなり、従来小説等には全然看過されて居た生活問題の如きも、将来は甚深な関係を以て描かれるでありましょう。」

と文壇の将来を展望しているが、藤村が「深く人生を知る」とか、「人生に相触れた」作品が文壇の将来を主導するだろうと述べているのも、彼が「破戒」において到達した自己の文学に対する自信の上にたつ展望であったに違いないし、「破戒」を評した、島村抱月が、「欧羅巴に於ける近世自然派の問題的作品に伝はった生命は、此の作に依って始めて我が創作界に対等の発現を得た」（**早稲田文学、明39・5**）と賞賛して、「破戒」が文壇の新しい廻転期となる作品であろうと述べていることも、このような文壇の「深く人生を知る」といった作品を求める空気を如実に反映して、自然主義文学が本来持っている社会問題につながる傾向性を日本の自然主義作家にも期待したからだと思われる。

独歩の作品が「運命」の出版後ようやく読書界に迎えられるようになったということも、このことと無縁であったとは思われぬわけである。

浪慢的抒情詩人として文壇に登場した独歩が、「一個人を深く見るは、あらゆる歴史を見ることなり。」と「個」の考察を深めることから「吾が享け得たる生を以て人間の上に尽す可き義務」（明27・1・23）を文学者の義務と考え、「観たる所、感じたる所、考へたる所」をありのままに述べることによって、「一個人の上に行はるる自然の法則は万人の上に行はるる法則なり。」（明26・12・31）と個人の運命を支配するものの中に、すべての人間を支配する法則を探ろうとし、そこに人生の意義を痛感しようとする作家としてリアリズムの創作態度をおしすすめた結果、独歩の作品に一貫する「人生とは何か」という問題が、晩年の「窮死」や「竹の木戸」に見られるような「人生問題」や社会の真実にも迫り、その断面を鋭くえぐり出すといった自然主義作家としての条件をそなえることになったと思う。

島崎藤村が、独歩の初期の作品の中に早くから見られた「自ら敗れたものや、世の中から斥けられたすたり者の間にも一種の面白味を見出して之を描く等は消極的の方だと思ひます」が「新しいそして真に真面目な処があります」（前掲、緑陰雑話）と指摘した言葉も、このような独歩文学の傾向を言ったのであって、日本の自然主義文学が、人間の獣性とか性欲面のみに偏って安易に理解される風潮の中で、独歩が「所謂る自然派の作家」と同一視されることを嫌った理由も、今まで見て来たように、

「人生問題に煩悶した当時の我から全く離れて、ただ文芸の為めに、文芸に埋れ度くありません『人生の研究の結果の報告』といふ覚悟は何処までも持って居たいのです。」（奈何にして小説家となりし乎、明40・1「新古文林」）

という独歩の「文芸の為めの、文芸」とかたんに「文芸上の主義」を標榜して人生問題にふれぬ、内容の空疎な作品を無価値なものとした考えからであったと思う。

島崎藤村が透谷や二葉亭とともに独歩を「敬重する」といったことや、「開拓しかけた文学」とか「先輩の遺した・精神的の事業」といったことも以上述べたような、独歩の文学に一貫する創作方法の特色と、このような文学観に立つ独歩の文学活動を指しているのであって、「独歩が詩人」の本分と言ったことも、このような文学観を基盤にした文学活動を言ったのであったことも。、すでに理解されたことだと思う。

註1　窪田空穂「国木田独歩の生前に於ける小説家としての人気」参照

2　中島健蔵「国木田独歩集」筑摩書房版・所収

3　吉野　裕「国木田独歩の生涯と文学」唯物論研究第六十五号参照

4　前田　重「独歩の秘密」展望第十七号参照

5　小川五郎「国木田独歩年譜考」国文学第四巻第七号参照

6　稲垣達郎「社会主義文学」岩波講座日本文学史第13巻参照

7　「要するに文学は到底、懐疑者のかくれ場処のみ」とした独歩と、ここではふれなかったが幸徳秋水の独歩宛の書簡などから窺える両者の相違が今後の課題となっている。

8　片岡良一　「浪漫主義者としての独歩」や、自然主義との関係についての先生の諸研究に負うところが多いことを付記します。（一九五九年一〇月）

（横須賀市立不入斗中学校教諭、本学日本文学科一九四八年卒業）